

私たちは、今年は聖餐式の聖書日課においては、マルコによる福音書を中心に学ぶことになっています。先週の聖書の箇所は、イエス様が伝道活動の最初に、ガリラヤ湖畔の港町、カファルナウムの会堂で、汚れた霊に取りつかれた男を癒されたお話でした。この奇跡を通して、イエス様の言葉には権威があり、悪霊さえ、その言われることを聞くので、イエス様の評判は、たちまちガリラヤ地方の隅々にまで広がった、という言葉で締めくくられていました。

今日は、それに続く話で、29節には「すぐに、一行は会堂を出て、シモンとアンデレの家に行った。」とあります。実際、現在ガリラヤ湖の港町カファルナウムに行きますと、3世紀頃のユダヤ教の会堂跡が残っていて、この町の一番大きな遺跡になっています。ところが、その建物の南側、湖に近いところに現在は大きな船の形をしたような「聖ペトロの教会」が建っていて、その下には、ペトロの家の跡と言われる遺跡が残っているんです。同じ出来事を書いている、ルカによる福音書の4章38節では、「イエスは会堂を立ち去り、シモンの家にお入りになった。」これなどを根拠に、会堂のすぐ隣りにペトロの家があったに違いない、という話になって、聖地ではペトロの家の教会ができあがってしまうんです。

さて、このシモン・ペトロの家では、シモンのしゅうとめが熱を出して寝ているのですが、イエス様が彼女を癒されると、会堂での奇跡や、そのあとのシモンのしゅうとめの癒しのお話を聞いたのでしょう。「夕方になって日が沈むと」人々が病人や悪霊に取りつかれた人たちを、イエス様のもとへ連れて来ました。

イエス様が会堂に入られたのは、ユダヤ人の安息日である「土曜日」のことです。この日は、安息日。聖なる日ですから仕事をしてはいけません。病気を治してもらうのも、安息日が終わった、土曜日の日没以降ということになり、やっと人々が活動し始めたことが、この短い文章の中でも想像できます。

イエス様は、その大勢の人たちを癒し、悪霊を追い出されたことが書かれています。きっと夜遅くまで働かれたのでしょう。

私が今日注目したいのは、そのあと。翌朝のイエス様の行動です。

35節に、「朝早くまだ暗いうちに、イエスは起きて、人里離れた所へ出て行き、そこで祈っておられた。」ということが書かれています。

このマルコによる福音書で、イエス様が祈るために出かけられた所は、今日のあとで2箇所あります。

二つ目は、6章の5000人に食べ物を与えたあと、弟子たちを舟に乗せ、群衆を解散させて、ご自分は祈るために山へ行かれた、という所。

三つ目は、14章、最後の晩餐のあとで、オリーブ山のふもとにある、ゲツセマネという所へ行かれた時の祈りです。

最初のふたつは、群衆から注目された時に、そこから逃げるように祈るために出かけておられます。

今日の所では、シモンとその仲間がイエス様のあとを追っかけて来て、「みんなが捜しています。」と言いました。おそらく、まだまだイエス様に病気を癒していただきたいとか、悪霊を追い出していただきたい、という人々が押しかけて来たのでしょうが、イエス様は、そのカファルナウムに留まるのではなく、「近くのほかの町や村へ行こう。そこでも、わたしは宣教する。」と言って、人々の期待とは違う行動に出られました。

5000人を養った時には、ヨハネによる福音書などでは、人々がイエス様を王にしようと、迫ってくるのを避けるために、山に退かれた、ということになっています。

これらの二つの出来事には、祈ることの意味が、そこに現れているように思えます。

そして、最後の祈りは、ご自分にこれから大きな出来事（逮捕されて、十字架に架けられること）。それを引き受ける決断のための祈り、というふうに考えられます。

さて、それで今日は『イエス様さえ、祈られた。』私たちが日々祈ることの意味、意義を、ここからも学ぶことができるのではないか、と思います。

私は以前、人から勧められて、1冊の本を読んだことがあります。

【人は何のために「祈る」のか】“生命の遺伝子はその声を聴いている”。という副題がついています。村上和雄という、筑波大学の遺伝子の科学者が、棚次正和という宗教学者と、科学的な視点から、祈りについて探求した書物です。

村上さんはこの本の最初の方で、2002年（今から22年前ですね）、「心と遺伝子研究会」というのを作った。自分が遺伝子の研究を続けているうちに、人間の心のあり方が、遺伝子の働きに影響を及ぼしていると確信するようになった、というのです。

そして、笑いが、糖尿病患者の食後の血糖値上昇を抑えることを発見した、と言います。そして、これは、祈りをするのとしらないのとで、やはり祈るほうが、病気がなおる率が高い、というような話が入ってくるのです。

読み進めるうちに、人に暗示をかけるような、たとえば100人ぐらいの学生の中から、5人ほどを無作為に選んでおいて、「君たちは100人の中で、特に優秀だ。」と言ってほめたら、そのあと、その人たちは、大変学力が伸びた（ピグマリオン効果）、とか、「偽薬（プラシーボ）」を渡して、これを飲めばあなたの病気は治ると言ったら、効果があった、など、人間は気分で体の調子まで変わる、などの例をあげながら、話をするんです。「病は気から」みたいな話になる。

そんなことが、祈りということと結びつくのだろうか、安っぽく見られているのではと思いました。

ところが、ところどころ、ハッとするようなことが、出てくるんです。

「なぜ、祈ることを続けてきたか」というタイトルの章で、人間は、自分ではどうしようもない問題、たとえば病気になった時、祈ったら治った。だから、困った時に、人間は祈るんだ。しかし、祈っても治らない場合の方が、もっと多いかもしれない。それでも祈るのはどうしてか。

合格祈願をして、神社の賽銭箱に1万円を入れる。100円でもいいが、1万円のほうが効くような気がして奮発する。しかし結果は不合格。それでも「お賽銭を返してくれ」と言う人は、まずいません。

ここに、大昔から祈ることに人々が見出してきた大きな効用がうかがえる。人は自分の欲求や願望を満たしてもらうために祈りますが、そうならなくても祈ることをやめませんでした。その理由は、もっと大きな効用に気づいたからです。それは何かといえば「心が安定する、ブレない生き方」ができるということを主張するのです。

人間にとって一番の問題は死でした。ふだんは意識していなくても、命に限りのあることはいやでも知らされる。また日々の生活の中にも、さまざまな不安や恐怖、悩み、迷いなどが出てきます。そういうものと対峙しながら生きていくのはけっこうつらいものです。

不安定な心を何とかしたいと人々は考えました。宗教は人々のこの気持ちを吸収して発展していきます。そのとき決定的な役割を果たしたのが、祈りだったと思われまます。祈りを捧げていると心が落ち着きます。心の中に中心軸ができて、ブレない生き方ができるようになるのです。人々はそのことに気がついたのです。

「ブレない生き方」とは、人間が生きていくために必要な生命エネルギーが流れてくる、その根源と結び付くということです。生命の根源とつながることが祈りなのです。生命の根源から与えられた生命力によって人間は生きている、このことを人間は太古から直観していたはずです。

宗教ではこの生命の根源を神や仏と呼んでいますが、宇宙法則や大生命といっても同じことです。「ブレない」とは、このような生命の根源に人間の意識がしっかりと結び付くことであり、それが祈りによって実現されるのです。

イエス様は、病気を治したり、沢山の食べ物を与えることで、注目をあび、本来の神様の御心を行うという使命がブレる危険を感じたのではないか。また、自分が逮捕され、殺されるという出来事を前に、恐れを感じ、神様からの力と言うか、恵みを頂いて、乗り越えようとして、そんな時に祈られたのではないか、と私は思ったのです。この祈りの本は、私たちの祈りについて、考え直させてくれる、良い本のように思えました。

祈りとは、自分の不安定な心を静め、神様の気持ちを理解しようとする態度として、信仰者に一番基本的なことなのです。